

家族考えた間取り

家族の団らんがはずむ住まいとは。子どもがすくすく成長できる間取りとは――。今、家族のコミュニケーションの観点から、住宅の間取りが見直されている。今回は、集合住宅での新しい動きをレポートする。

家族間のコミュニケーションが取りやすい間取りとはどんなものなのだろうか。家族と間取りの関係性についての著作が多い建築家、横山彰人氏に話を聞いた。

「今、家族のコミュニケーションは基本から考えなおさなければいけない状態になっています。最近よくいわれているのが、子どもの成長にとって、子ども部屋はよいものなのかという議論。今の子どもに欠けているのはコミュニケーション能力です。壁で仕切った子ども部屋は、そうした能力を育てにくいという考えが出てきました」

横山氏は、子ども部屋は寝るだけの狭い空間にし、勉強などは食卓やダイニングにつくると子どもコーナーで行えばいいと考えている。同じ空間で家族と一緒に学び遊ぶことが、コミュニケーション能力を培うからだ。

そしてその分、夫婦間の十分なコミュニケーションを補うために、主寝室を広く取れることをすすめる。ベッドだけでいっばいになるような狭い部屋でなく、趣味も楽しめるような余裕ある空間でこそ、夫婦が真に豊かな関係を築けるという考えだ。「夫婦

の強い絆は、必然的に家族全体に良い影響を及ぼす」と横山氏は話す。

また、最近の集合住宅で人気なのが、リビングとダイニング、キッチン隔たりをなくした、オープンな一体型空間。

「もともとリビングは、欧米にならぬ接客時の接遇や家族のコミュニケーションの場として、日本の住宅に導入されました。しかし、日本の家族は食卓を囲みながら団らんするというのが一般的で、リビングそのものが上手に使われていなかったのです。さらに仕切りのあるキッチンでは、調理をする主婦がリビングでの家族の会話に参加できないため、間取りを工夫したいという要望が増えてきました」(横山氏)

こうしたことを背景にして、オープンなリビング・ダイニング・キッチンの空間が好まれるようになったと横山氏は分析する。

■事例1

隔たりない空間

実際に、家族のコミュニケーションを考えた間取りの事例を見てみよう。

空間の隔たりのないリビング・ダイニングに家族が集う(アンビシャス)



マンションペロップ、アンビシャスが提供する「アンビシャス松戸六高台」(千葉県松戸市)は、東武野田線六実駅近くにある分譲マンション。

設計監修を行った建築家、碓井民朗氏は「コンセプトは家族の団らんができる家。その実現のために『サークルリビング』を開発しました」と語る。

一般的に対面型キッチンには、上部でリビング・ダイニングと空間が仕切られるが、サークルリビングでは、壁がなく天井が同じ高さで連続した一体空間となっている。空間の隔たりをなくすることで、家族の会話が増える」と碓井氏。キッチンからリビングに死角がないので、小さな子どもがいる家族でも安心でき、自然と家族がキッチンやリビ

効率をしながら子どもの様子が見える間取り